

# 美術学習における表現を高める指導試案

中 野 満 男

- 美術の学習における教師の働きを考えてみると
1. 生徒の潜在的表現能力を啓発して高める。
  2. 表現能力を新たに与える。

に分けることができると思う。この二つのものには分けることのできない相関もあるけれども、ここではそのように分けてみた場合の1についてだけ考えてゆきたいと思う。

教室の中で生徒がものを考えたり、作ったり、描いたりするとき、様々のものから影響を受けるであろう。例えば近くの席の生徒の作品を見て受ける影響は少なからぬものがあるであろうし、その生徒の創造活動の内容がそれによって変化することは、仮りに防ごうとしても防ぎ切ることにはできない。このような卑近なものをはじめとして、美術の創造活動をするために生徒が内に持っている感覚・造形能力・表現意欲・創造性等が常に外からの色々な刺激を受けて進展したり後退したり、又拡張したり萎縮したり様々に動かされるであろう。しかもそうした刺激に対する反応のし方は個人的性格によって千差万別なものがある。

教師はここで、生徒が受ける種々雑多な刺激の要素を、できるだけ有益に働くように整理してやることも大切であるし、有益な刺激を計画的に作って与えることは、より大切な役割であろう。そのため教師が、表現活動の動機づけのために、教示の与え方、教科書の使い方、参考作品の見せ方等に苦心することになるのである。

このようなことからの中から実験したいいくつかの試みについて述べたいと思うが、ここで更に潜在的な表現能力を啓発する手段をもう一步分けてみるとすれば

- (A) 生徒を、新しい強い創造意欲を持たざるを得ないような立場に立たせてやること。
- (B) 次の表現を進めるための足場になるような、又表現意欲や創造する工夫の場所を広げるような有効な刺激を与える。

の二つが考えられる。

この(A)について次のような試みを行ってみた。

## イ. 表現方法の多様化

若しも年中同じような題材によって、同じような表現を行っていたならば、特別な生徒は別として大部分

の者が意欲も態度も漫性化し、無気力なくり返しを行うことになることは当然である。この場合、新しい表現方法をとらせることは、生徒の気持に刺激を与え、又それに適した技術を考えさせることによって、新たな表現の可能性に立ちむかう意欲をかきたてることになる。しかし新しい技法の中で、とくにオートマチズムと呼ばれるものにおいては、新しさが刺激にならずに無意味な遊戯の空転に終る危険が多いので、その取扱いに正夫が必要である。

この場合、教材配列の前後関係によってその効果が大きく変わってくるのでこの点の研究が大切であろう。

## ロ. むつかしい課題

漫然とした気持では表現できず、新しい創意を常に働かせるようにさせるために固定的な観念では表現できないような課題を与える。

例えば「空のない風景」「ブルドーザーで切り開いた土地」というような題を与えたり、小さなものを巨視的に描かせたり、視点を変えて描かせたり、というように生徒の表現経験や鑑賞経験にはなるべくないような題材を選んで与える。生徒はかなり苦痛を感じるようであるが、できた作品は迫力のあるものが多くあった。

## ハ. ないものを工夫して表わす

例えば「文字を創る」「不思議な魚」「見たことのない動物」等、具象的な表現で、しかも直接的な経験だけでは考えられないものを創り出させる。

全体的にも部分的にも、現実のもの形や色に近づけようとする傾向をとりがちであるから、できるだけ現実をはなれて形体や色彩の造形感覚に頼らなければならないようにさせる。そして結果もそのような作品に造形的な迫力に富むものが産まれた。

## ニ. 紙の形や大きさを変える

例えば、たてに2等分して細長い形にした画用紙に描くことをさせる。ものの表わし方や生まれる結果を考えさせることによって、強い創意を働かせざるを得ないようにしてみた。

又、一度でき上がった作品に対して、写真で行うようなトリミングを行わせる。これは作品の完成に対する創意的意識にもう一步進展を与えることになる。とく

にデザインの教材でこのことを効果的に適用する場面が多い。

ホ. 習慣的な題の制限, 又は強調

例えば年賀状の教材の場合に, 自由に題材を選ばせると, きまって「日の出」「富士山」等を何の創意もなく表現するものがかかり出でくる。そういう題材のものの中に創造的な作品は皆無とは言えないが数は極めて少い。このような無気力な表現をとらせる可能性をもった題材は禁止することによって, もっと創意を働かせなければ表現できないものを選ばせる。

これとは逆に, 「日の出」「富士山」を題材とした年賀状を敢えて全部に表現させることも面白い結果を生んだ。その場合, 表現はすべての面で独創的であることを目的とするのである。

ヘ. 色彩を制約し又は変える

色彩を制約することは, 版画やデッサンの色彩表現が無彩色に制約されて行われるように, 新しい表現意識を刺激することになる。又色彩を固有色から変えることは, 創造性を働かせる場面をおし広げて自由することになる。そして例えば「暖色だけで風景を描く」「寒色だけで人物を描く」「実際と異った色彩でかく」というような課題によって, 発想や表現における模倣を困難にし, 意欲的な態度をもたせるようにする。

その場合, すでに実在する対象物から色彩を求めらるのではなくて自分の色彩をつくり出す工夫が要るのであるから, 完成の結果を予測させることが重要であり, それには色彩に対する理解が必要である。この点で, 色彩の学習と或る程度並行して進めると行ないやすく, 学習の効果も又上るように思う。

次に(B)について試みたことは作品についての「話し合い」である。

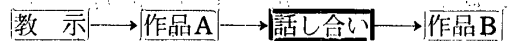
この方法は教育のあらゆる部面で, あらゆる場所で行われていて, その用い方も効用もわかり切ったものとなっている。しかし特に美術の表現力を刺激するためのものとして次のようなことが期待できるために, これをこの目的に使用してみたのである。

1. 教師の専門的感覚や素養からの意見によらず, お互に同程度の生徒の間で発せられたり行き交ったりする意見には, 能率的ではないけれども, より理解しやすい内容と言葉があるのではないか。

2. 生徒の意見は教師のそれよりもお互いに批判的に受けとり合うから, 各自の考えを深め, 練る上に有効ではないか。
3. 教師は生徒の意見の中から生徒の実態を読みやすくなるので, 生徒と教師間の感覚のズレも見つけやすくなり, それをもとにしたより有効な授業の進展を工夫することができる。

学習過程における「話し合い」の位置は次のようにした。

イ. 生徒作品の場合



ロ. 参考作品の場合



「話し合い」の持ち方は次の二つの方法で行った。

イ. 教師がリードする。

これは美術の学習において一般的に行われている方法である。実施が簡単で時間が経済的であり, まとまった結論も出し易いが, 発言の積極的な生徒に限られる欠点があり, したがって話し合いに対する全員の熱意が期待できない。

ロ. グループによる発表をもとにして進める。

学級をいくつかのグループに分け, これらに生徒作品を分け与える。この作品について研究討議を予めグループ毎に持たせ, まとめた結果を順次グループ代表者によって発表させ, これにもとづいて学級全体で討議させるのである。

この方法によれば, グループ別の段階で全員が話し合いに参加するので, あとの段階でも発言する者が多くなるし, 発言をしない者も話し合いの内容に意欲的に参加していることを感じた。そうした好結果を得たものの, 時間を多く費すことと, 無駄な意見が多く出る欠点もある。話し合いという方法は教材によって効果的であるものと, そうでないものがあるろうし, それ自体の欠点も考え合わせて, その適用は慎重でなければならぬと思った。又, 美術の学習の場合, 話し合いで最も狙いとしたものは, 表現の場面にもたされる刺激であり, したがって結論を出すことよりもこれに参加する意欲が大切であると感じた。

以上あげたことは未だ文字通り試案の域であって, その効果については明確にすることができなかったので, 今後の研究を期したい。